
Jeffrey P. Williams, *et al.*, eds., *Further Studies in the Lesser-Known Varieties of English* (Cambridge University Press, 2015). Pp. xvi-345.

田中 春美

はじめに

前著（田中春美「3つのLKVE (*The Lesser-Known Varieties of English*) について」塩沢正ほか編『現代社会と英語：英語の多様性をみつめて』金星堂, 2014, pp. 80-92) で、数多くのLKVEの中で3つの具体例——チャネル諸島, バハマ諸島, ピトケアン島——を選び、紹介したが、その中核をなすDaniel Schreierほか編, *The Lesser-Known Varieties of English: An Introduction* (Cambridge University Press, 2010) の序文 (p. 5) で予告されていたその続編が出版された。ここでは13ヶ所のLKVEが扱われているが、前著にならってそのうちの3つを選び、それぞれを大ざっぱに紹介し、全体の書評に換えたい。

そもそも多様なLKVEに注目し、それに言及したのは英国の学者Peter Trudgillであり、夫人Jean Hannahとの共著*International English: A Guide to the Varieties of Standard English*の第4版 (Arnold, 2002) で、新たに短い第7章 (pp. 115-122) を設け、その章の題名をLesser-Known Englishesとした。その同じ年に、TrudgillはRichard Wattsと共同で*Alternative Histories of English* (Routledge, 2002) を編集し、自身も第2章を書き、そこで世界の21の地域にまで短く言及している。さらにSchreier (2010) では17ヶ所のLKVE、上述のように、Williams (2015) では13ヶ所のLKVEが紹介されている。もちろんその中には、バハマ諸島やトリスタンダクニャ諸島のようにダブったものもあるし、

Trudgill = Watts のインドのように、普通は第 2 言語の英語として扱われるものもあるので、数については注意する必要がある。

ところで、LKVE として認められる特徴としては、Schreier (2010) でも Williams (2015) でも、ほとんど同じ 8 つが挙げられているが、紙面の都合で、ここでは繰り返さない。いずれにせよ、ここで取り上げられる 3 点は、それらに合致するものであることは、言うまでもない。特殊な記号や長い説明を必要とする音声面は避け、主に文法・語彙面に限る。

1. ジブラルタル英語

ジブラルタルは、スペイン南端とアフリカ側のモロッコ間の海峡で、大西洋から地中海への玄関口である。スペイン領であるという永年のスペイン側の主張にもかかわらず、今でも英国が直轄する植民地であり、したがってスペイン語と並んで、英語が通用する。このうちスペイン語は、標準的なものより、アンダルシア方言に近い Yanito と呼ばれる形が普通であり、ジブラルタルの住民は、これら 2 つまたは（スペインの標準語も含めて）3 つの言語に馴れた 2 言語または 3 言語話者であることが多い。歴史的には、イタリア人、特にジェノア人が多く、ユダヤ人やアラブ人も多かったので、スペイン語やその方言以外にも通用していたが、1713 年のユトレヒト条約で英国への帰属が決まり、英語が公用語となった。特に第 2 次世界大戦以降は、スペインの独裁政権への反発もあって、英語の地位が高まったところがある。

Yanito を思わせる rolipó (lollypop アイスクャンデー) や combi (corned beef コーンビーフ) のような語彙の借用が多く、またスペイン語の動詞に英語の動名詞をつける表現 (例: tomamos untrainqui(ng) 一杯飲もうよ, voy shopping 買い物に行く) などがよく使われる。いずれにせよ、ジブラルタル人は、2 つの文化 (英国・スペイン) のいいとこどりをしていることになる。

2. アメリカ・インディアン英語 (AIE)

次の AIE は 1 つの変種ではなく、いくつかの変種の 1 群であり、北米の原住民が 1 つではないように、彼らの話す英語も 1 つではない。ただその変種間には言語的にも社会的にも関係があり、アメリカ合衆国とカナダで 4 百万の人によって話されている。ただ、誰が原住民で、誰がそうでないかを判断するのは、大変難しい問題である。

1492 年の Columbus の新大陸発見よりヨーロッパ人が植民して来るまで、50 を超える語族から成る 300 に近い言語が話されていたが、植民の圧力や疾病などのおかげで、その多くは記録されることなく、失われてしまった。最初陸軍省の管轄だったインディアン問題が、内務省に移り、現在はインディアン局 (BIA) に委ねられている。その結果、無理な移住をさせられたり、子供たちの教育を通して、同化を進められたりした。北のカナダも大同小異である。

形態統語面では、まず繫辞 (copula) があってもなくてもよく (This __ my grandpa これは私のおじいさん)、ある場合には無変化のまま (I be home soon. すぐ家に帰る。) が多い。動詞については多様で、AIE 以外の英語と主に異なる点である。その要因の 1 つが、AIE の祖先の言語の影響である。いずれにせよ、AIE では時制と相が、さまざまな形をとる。したがって、複数の主語でも単数の主語でも、主語と動詞の不一致が起こることもある (This traditional Indian *ritual* that take place in June. 6 月に行われるこの伝統的インディアンの儀式)。

名詞では、複数語尾や所有格語尾が AIE では任意的で、文中の他の語で表される (Three other *place* we went. 私たちが行ったほかの 3 つの場所; my sister husband 私の姉妹の旦那)。代名詞は省略されたり (Now when __ hear that... ということを知った今)、性が混同されたりする (The *boy's* zipper got caught in *her* jacket. 少年のファスナーが彼の上着に引っかかった)。冠詞も

AIE では任意的である (You're __ nice person. 君はいい人だね)。

多重否定はよく起こる (*No police didn't catch us*. 私たちは警察に捕まらなかった)。前置詞は他の英語の変種とは異なり, 別の前置詞を使うか (*Let's ride on your car to Pizza Hut*. ピザハットまで君の車で行こう), 省略される (*They live __ New York*. 彼らはニューヨークに住む)。

語順のうちで特に目立つのは話題化 (topicalization) である (*That man, he went to town*. あの男は町へ行った)。

語彙の研究はあまり進んでおらず, 特記すべきことはない。代わりに, 語用論 (pragmatics) の研究が進んでおり, 沈黙・質問・ユーモアなどが取り上げられている。

結論として, これまで西の種族の居留地内での言語記述が多く, 東部やカナダの研究が遅れ, 居留地外での研究の必要性が強調されている。

3. パーマーストン島英語

太平洋南西部のクック諸島 (ニュージーランド自治領) の環礁パーマーストン島の住民は, 1人の英国人 (William Masters) とその3人の (クック島出身の) 妻, フェルナンデスと名乗るポルトガル語を話す男と, 小人数のクック諸島出身者からなり, 無人島だったところへ 1860年のはじめに移住して来た。その後 1877年に, 最初の宣教師が立ち寄った時には, この島におよそ 30名の住民が居たという。今日の住民は, Masters と 1人の妻から生まれ, パーマーストン島英語の 1言語話者で, 著者が 2009年 7~8月にフィールドワークをはじめた時, 13人の成人女性, 13人の成人男性, 8人の子供からなっていた。

その後もほとんど外部世界との接触はなく, テレビや DVD の影響も, ほとんど皆無に近い。その状況で住民は, 北部に住む人を *beachfellas* と呼び, 南部のヤシの木の間に家を建てた人を *bush people* と呼ぶ。島で学校と教会

の影響は大きく、教師はニュージーランド人、牧師はクック島出身のマオリだが、家庭ではあまり両変種は喜ばれず、高層語 (acrolect) として敬遠され、会話は主に低層語 (basilect) のパーマーストン英語で行われる。

代名詞では、two of us のように、自分を含むか (inclusive) 含まないか (exclusive) のどちらにも使えるものや、やや年配の人が使うような yumi (inclusive のみ) や、若い人たちの himshe のように、両数だけに使うものもある。また、文脈から指示物が明らかな時は、主語であれ目的語であれ、省略される可能性があり、特にそれは男性に多く見られた。

名詞の複数形に childrens, womens, mens などが使われることがある。所有と関係節以外は、名詞句の構造は標準英語と同じであり、blood pig (豚の血) の例や、There was someone^v already been there. (^v に who had が抜けている) のような例がある。

動詞では、3人称単数の時だけ裸の (bare) 動詞が使われ、ほかでは -s が使われる (goes)。しかし、この体系は変わりつつある。未来時制は we'll, going to, gonna のどれかで表され、過去形は -d 語尾を余分につけたり (passeded)、子音連続を避けて -d を落としたり (裸の動詞)、動詞前の標識 been をつけたり (been go) する。

動詞の相は、文末に finish をつけたり、過去分詞 (done, seen, been) を使ったりして、完了を示し、進行形は -ing, ening (fishening など) の語尾をつけて表す。あまり使われないが、仮定表現として be が使われ、mustbe は副詞のように使われる。動詞によっては、次に来る前置詞が標準英語とは異なる。

パーマーストン英語の語順は、基本的に SVO だが、名詞・形容詞・場所を表す述語では繫辞がないのが普通である。また、述語を前置詞、話題化するのが普通である。Yes / No 疑問文は同じだが、陳述文の語順でイントネーションだけで疑問を表わすこともある。また、埋め込み疑問文で語順が異なることもある (You describe *where is the dog*. 君は犬がどこに居るかを述べる)。

語彙の特徴としては、多くの項目が名詞や動詞 (You bloom now. 今掃除をす

る；*She bright her eyes*. 彼女は大きく目を見開く) となることであり、他の英語の変種より、形容詞と動詞の区別があまり鮮明ではないのが特徴となる。植物や動物の多くはマオリ起源だが、他にも *motu* (島人) のようによく使われるものもマオリ起源である。悪いことをする子供に使う /ʃɛɪ/ は、たぶん英語の *shame* から来ていると思われるが、はっきりはしない。また、鳥は *catches* ではなく *picks* であり、*down* は北への意味で、*up* は主な住居から離れる南へという意味である。

結論として、パーマーストン英語は、ニュージーランド英語と同じ2つの入力、英国の英語とマオリ語の影響を受けながら、違った結果を生み出している。また、他の太平洋英語（特にピトケアン＝ノーフォーク英語との比較）も重要であろう。島の将来も分からないので、この種の英語の詳細な記述は、急がねばならない。

終わりに

以上、新しく出版された本から、3ヶ所だけの記述を紹介した。いずれも消えて行く運命のLKVEなので、この数年での詳しい記述が望ましい。この種の研究が緒につくことは、まことに喜ばしく、これからの発展を願うばかりである。